

研究ノート

茨城県域における6・7世紀土師器の数値的検討ならびに地域性について

小西 竜世

要旨

茨城県内における土師器研究は、多数の新たな発掘資料が示されているにもかかわらずいまだ停滞したままである。そこで本論文は6・7世紀の土師器様式における地域性などを再検討することを目指した。坏と甕に見られる特質は以下のような特質が認められる。まず、碗型に近い坏の衰退などから県域全体での古墳時代中期的土師器様相からの脱却が認められる。その後、6世紀に入ると「須恵器模倣坏」を中心とした様式への劇的な転換が生じる。さらに「素縁口縁坏」の出現によって、「須恵器模倣坏」主体の土師器様式からの転換も認められる。甕に着眼すると、いわゆる「常陸型甕」の出現などに認められる6世紀以降の明確な地域性の発現などが特徴的である。加えて高坏と甗の分析を行った。高坏からは二つの特質が認められた。すなわち、古墳時代中期の土師器様相から後期における土師器様相への劇的な変化と7世紀後半までという長期的な高坏の利用が認められることの2点である。甗では「常陸型甗」の技法を取り入れた「常陸型甗」と呼ばれる器種が、「常陸型甕」と同様の分布を示すことがわかった。地域性に関する分析では、長谷川厚による先行研究で示された茨城県域の地域性とそれを示す器種の比較検討を行った。結果として、先行研究における大まかな範囲や器種におけるその妥当性を追認できた、一方、7世紀における「常陸型甕」の及ぶ範囲などのような、具体的な地域性のありようを再検討することが出来た。

キーワード：古墳時代後期 茨城県 土師器 様式論 地域性

はじめに

茨城県内における6・7世紀土師器の研究は、戦後すぐから開始された。当初は特定の遺跡、ないしひとつの遺跡に基づいた研究が中心であった。

その後、県内各地での開発が進行していったことなどから大規模なものを含めた多数の集落跡で発掘調査が行われた。それに伴い、多数の土師器が出土したことは言うまでもない。これらを活用した研究は1990年代にひとつの到達点を示した。

具体的には、県央地域の編年は榎村宣行と浅井哲也による編年（榎村・浅井1992）と榎村宣行による県南地域に対する編年（榎村1993）が挙げられる。この2つの編年は現在でも県内の土師器編年のスタンダードとして用いられている。

しかし逆説的に言えば、1990年代以降に開発などの各種事業にともなう発掘調査で発見された資料に基づく検討を行った研究者はほとんどみられないということである。渥美賢吾による近年の分析（渥美2013）はあるものの、対象としている遺跡において地域の偏りがあるなど、県全域を包括的に再考察したものとは言いがたい。

そこで、本論文では茨城県全域の土師器様式を、近年の発掘調査で発見された一括遺物などを伴う遺構により再検討するものである。今回はとくに高坏および甗に対

する詳細な検討を行い、筆者が推定する坏と甗による茨城県内の地域性と比較検討を行っていくものである。

I. 研究史

（1）茨城県内の編年研究のあゆみ

茨城県内における6・7世紀の土師器に関する研究の嚆矢となったのは、伊東重敏による鬼高式土器の紹介である（伊東1954）。そこでは勝田市（現在のひたちなか市）市毛遺跡などに基づくⅠ期とⅡ期からなる簡易的な編年を示した。

その後も各研究者による研究は継続していった。伊東重敏が現在での古墳時代中期後葉から後期初頭の土師器に関する考察を呈示した（伊東1971）。海老沢稔と黒沢彰哉による「茨城県内出土土師器の検討」のうち、海老沢稔による「茨城県内出土土師器の検討（1）鬼高・真間期における茨城県内出土土師器編年試論」では県内の総合的な編年案をはじめて示した（海老沢1980）。さらに続いて黒沢彰哉により土師器坏に限定したより詳細な編年案が示された（黒沢1986）。

1990年代に入ると先述したように現行の標準的な編年である榎村宣行と浅井哲也による県央地区の鬼高式土器編年（榎村・浅井1992）と榎村宣行による県南地区の編年（榎村1993）が提示された。

(2) 集落遺跡の発見と編年

県内では多数の集落遺跡が発見されており、とくに大規模な集落遺跡では独自の編年案が示されることがある。これらは編年そのものの研究に援用される事が多い。

水戸市やひたちなか市などが含まれる県央地域においては、早くは那珂市森戸遺跡の調査に基づく編年案（加藤・西野・浅井 1990）が示されている。これはおもに古墳時代全般の土師器編年になっており、先に述べたいくつかの編年に、一括性の高い遺構と共に取り入れられている。その後、ひたちなか市武田遺跡群での土師器編年案（鈴木・佐々木・稲田・長沼 2010）なども示されている。

土浦市や石岡市、つくば市を含む県南地域では、とくにつくば市島名熊の山遺跡における遺跡編年案が代表的である（稲田 2003）。この編年案は18期区分から構成されており、およそ3期から5期が古墳時代後期に該当する。

(3) 近年の動向

近年の茨城県内の6・7世紀土師器に関する研究は、ほとんど渥美賢吾によるものである。特に7世紀に焦点を絞った分析と考察（渥美 2013）では、多様な器種のなかでも先行研究と同様に坏に着目し、律令期と古墳時代の揺れ動く中央政権に影響された「新型坏」の影響なども考察している。

ただしここで注意すべき点として、この論文で用いられている対象遺跡の中心が県南地域であることが挙げられる。すなわち、県全域を網羅したうえでの考察として扱うには資料の網羅が不徹底であるということである。

(4) まとめ

ここまですとまとめると、編年そのものの研究は20世紀のうちに進行した研究に基づいており、そこに現在までの主要な集落遺跡などの編年案が組み合わされて用いられていることがわかる。2000年代以降の研究は、ほとんど渥美賢吾によるものであり、それも県全域を包摂するものとしては不十分さが否めないのが現状である。すなわち、県全域をまとめた再検討を実施する必要があるということである。

II. 坏と甕による地域性について

(1) 本論文における地域設定などについて

本論文では茨城県域をいくつかの地域に区分したうえで分析を行っている。ここでの区分は現行の行政区分に基づくものである。北から県北地域（日立市や常陸太田市、常陸大宮市など）、県央地域（水戸市やひたちなか市など）、鹿行地域（鹿嶋市や行方市など）、県南地域（石

岡市や土浦市、つくば市など）県西地域（桜川市や筑西市など）となっている。

対象時期は古墳時代中期から後期とし、5世紀末葉から7世紀末までを対象とした。収集した遺跡は県全域の集落遺跡であり、合計40カ所となっている。

時期区分については、以下の通りとなっている。1期は中期末葉に該当し、TK73型式からTK208型式期にあたる。2期は5世紀後葉・末葉に該当し、TK23・TK47型式期にあたる。3期はおよそ6世紀前半に該当し、MT15型式からTK10古相段階期にあたる。4期は6世紀後半に該当し、TK10新相段階からTK43型式期にあたる。5期は7世紀前半に該当し、TK209型式からTK217型式古相期にあたる。6期は7世紀後半に該当し、飛鳥編年Ⅲ期からⅤ期にあたる。

(2) 坏と甕の器種分類や編年器種分類

坏と甕の器種分類は以下の通りである。坏では、おもに5つの形式に分けられる。坏A形式は、古墳時代中期、いわゆる和泉式期から継続する椀型の坏である。古墳時代後期には、須恵器蓋坏を模倣した形態の坏があらわれる。そのうち、須恵器坏蓋を模倣したものを坏B形式とした。坏B形式の変化した器種として、口縁部が著しく外反したものがある。これを坏C形式（とする）。須恵器坏身を模倣し器種については、坏D形式と呼称する。これ以外に、口縁部が直立して口縁部と体部の境に稜などがない器種もある。これを坏E形式からK形式とする。B・C・D形式では模倣の程度が変容するため型式を設定した。

甕では、A形式からN形式を設定した。このうち、甕D・E・F形式は茨城県域で見つかる特徴的な甕である。これらは胴部下半へラミガキと口縁端部の上方摘み上げが特質であり、先行研究（檜村 1998）に基づき「常陸型甕」と呼称する。甕A形式からC形式、甕H形式と甕I形式については長胴化の傾向があり、これに基づいて2型式を設定する。

編年（図1・2）

坏と甕については先述の5地域すべてで集成を行った。そのうえでの型式変化と組成を検討に基づく編年については別稿を投稿中である。今回は、その続編として器種の地域性を論じ、高坏・甕を編年する。そのため、時間軸となる坏・甕の県南地域編年のみを呈示するが、その実証過程は別稿を参照いただきたい。

(3) 坏にみられる地域性（図3）

古墳時代後期の土師器坏に関する大きな画期はおもに3つ挙げられる。一つ目は古墳時代中期的に主体的な形態の坏A形式に後期に特徴的な形態の坏B・C・D形

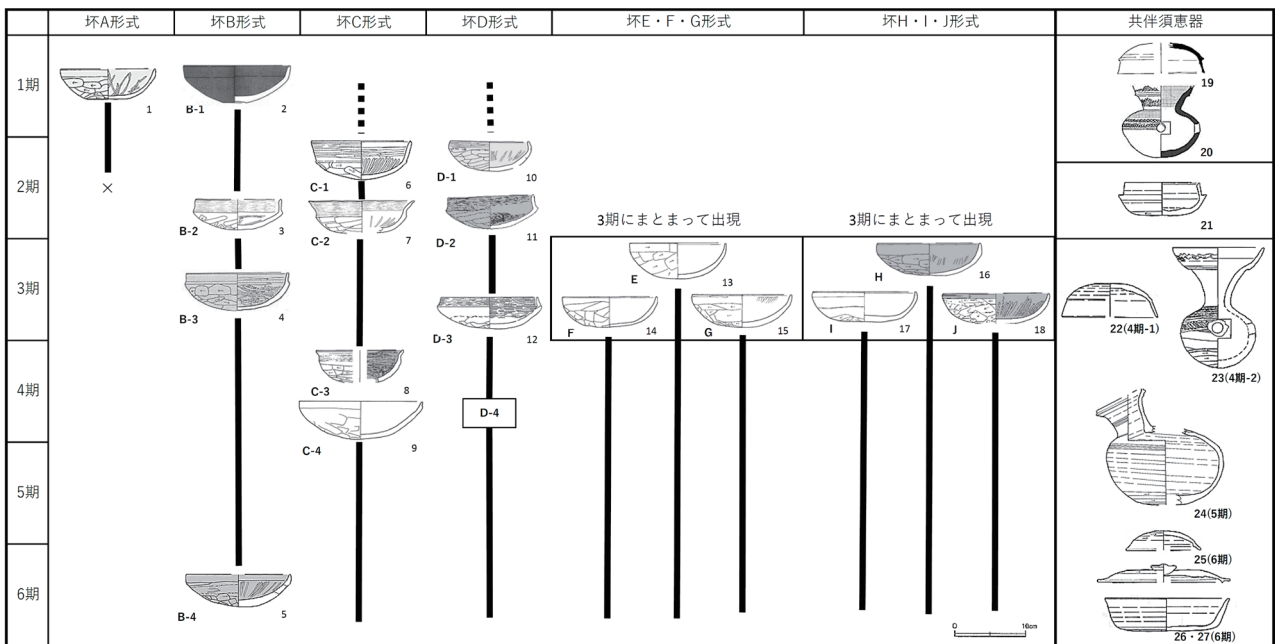


図1. 県南地域における坏の編年（筆者作成）

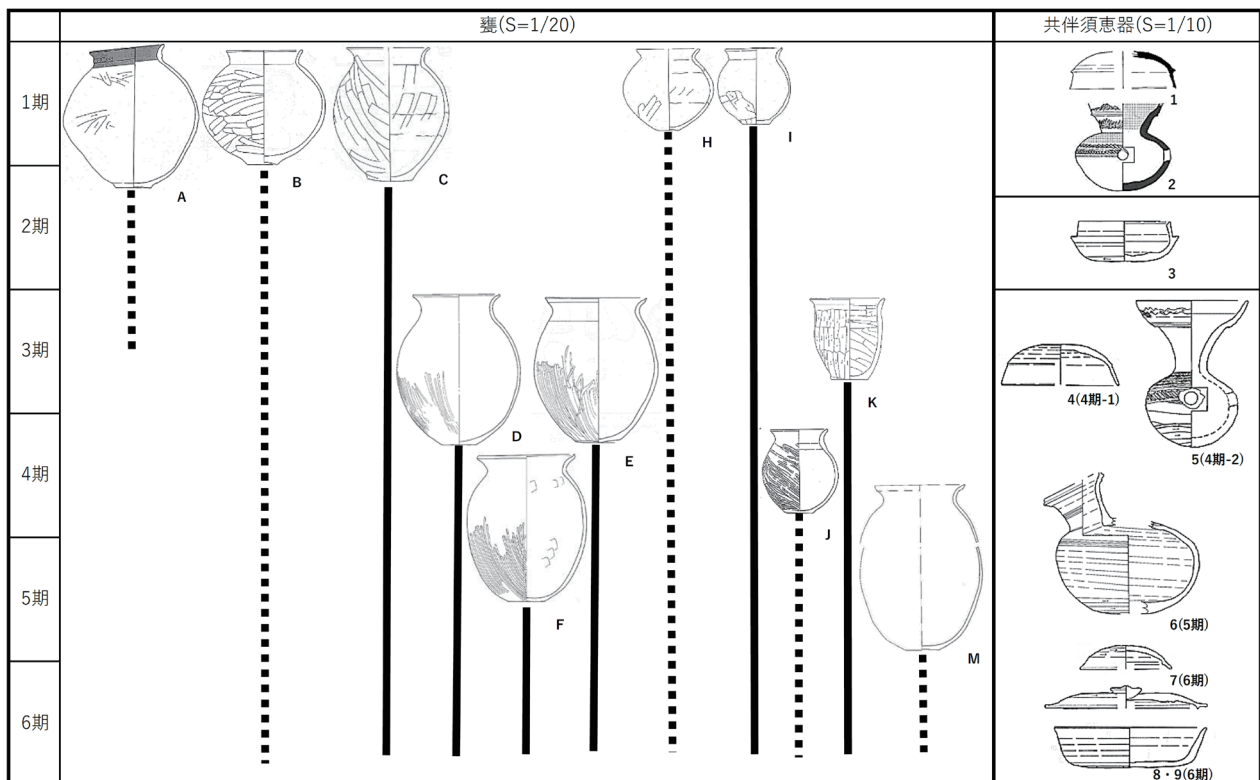


図2. 県南地域における甕の編年（筆者作成）

式が加わることである。関東地方における中期の土師器様式において、主要な坯の形態は図中における「和泉式系坯」であった。これは碗に近い高い器高を有することが特徴である。この器種と共に古墳時代後期初頭になると、いわゆる「須恵器模倣系坯」と呼ばれる器種が加わる。これは須恵器坯蓋および坯身の形態を模倣した坯である。種類としては忠実な坯蓋模倣である「須恵器坯蓋模倣坯」、坯蓋模倣の一種と考えられるが口縁部が著しく外反する「外反口縁坯」、忠実な坯身模倣である「須恵器坯身模倣坯」である。これらが併存関係を示すことが、最初の画期となっている。

二つ目は、須恵器模倣坯の台頭である。6 世紀に入ると「和泉式系坯」の坯に占める割合はほぼなくなり、代わって「須恵器模倣系坯」が主流になる。ただし、県央地域と鹿行地域においては、6 世紀前半頃ではやや「和泉式系坯」の割合が大きい。このように地域差が少しずつ生じてくることも特徴的である。

三つ目は「素縁口縁坯」の出現による新しい土器様式の成立である(図 4)。6 世紀後半頃から、口縁部に調整や特徴的な形態をもたないシンプルな坯が出現してくる。これは千葉県域などでも出土しており、「素縁口縁坯」と呼称されていることがある(高橋・宇田・小倉・松田 1999)。このような土師器坯が出現し、「須恵器模倣坯」と併存していくことが三つ目の画期である。7 世紀以降は県域全体へと分布するが、とくに県南地域で「素縁口縁坯」の割合が増加していく。これは古墳時代後期の特徴的な「須恵器模倣坯」主体の土師器坯様式からの転換として考えられる。

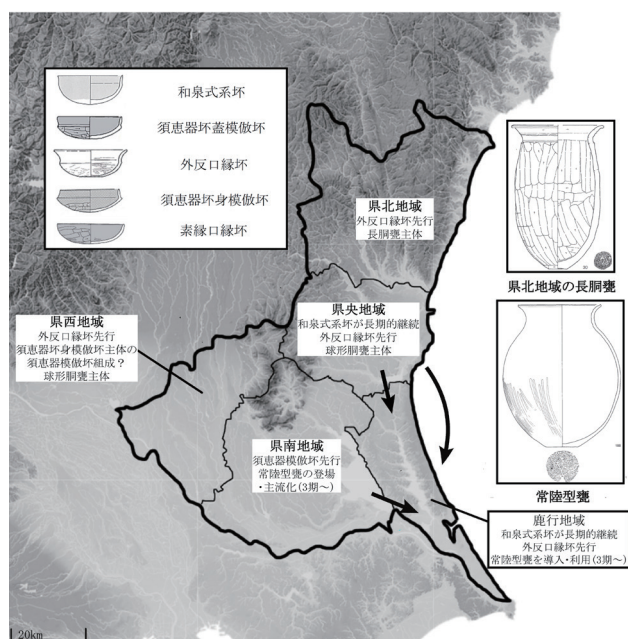


図 3. 土師器坯・土師器甕における地域性(筆者作成)

(4) 甕にみられる地域性(図 3)

土師器甕においては、土師器坯よりもさらに顕著な地域性を見て取ることができる。

6 世紀前半頃になると、甕 D・E・F 形式であるいわゆる「常陸型甕」が出現してくる。「常陸型甕」とは、樫村宣行(樫村 1998)や佐々木義則(佐々木 2007)、中村哲也(中村 2003)によるとおもに口縁部の端を上方に摘み上げることや体部下半にヘラミガキを施すこと、底部木葉痕を持つことが特徴的な甕である。

古墳時代の「常陸型甕」はこの特徴を形成していく段階の祖型ともいえるものとなっている。古墳時代における「常陸型甕」の祖型は、底部木葉痕は無く、少数であるが底部をヘラケズリやヘラミガキを施すことがある。体部下半のヘラミガキは上半にかかる場合もある。

このような「常陸型甕」の祖型は県南地域で 6 世紀前半頃に出現し、7 世紀までに主体的な甕として用いられる。この現象は鹿行地域にも及び、6 世紀前半から出現して 7 世紀になっても用いられる。

6・7 世紀における「常陸型甕」の分布は県南地域と鹿行地域にのみ分布している。このように、「常陸型甕」の分布から地域性を見て取ることが出来る。

Ⅲ. 高坯・甕の検討

(1) 器種分類と編年について(図 5・6、表 1・2)

本項では高坯と甕を分析していき、前項の地域性と比較検討をしていく。まず、高坯と甕の器種分類を行った。高坯は A 形式から M 形式の 13 形式を設定した。重

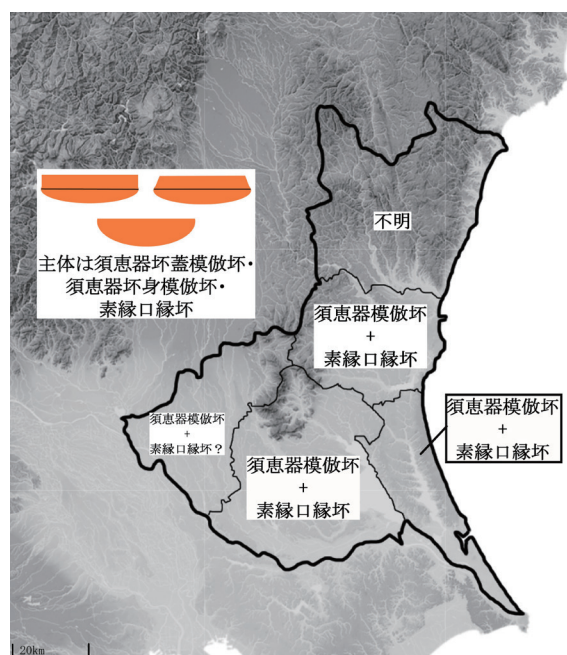


図 4. 7 世紀における土師器坯の様相(筆者作成)

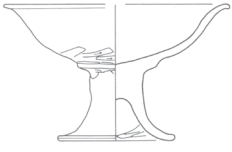
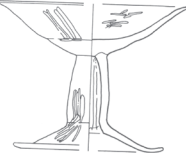
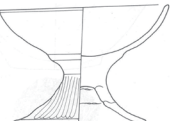
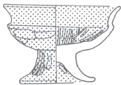
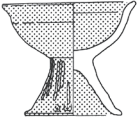
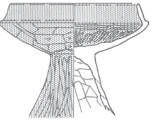
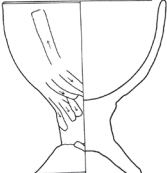
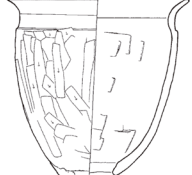
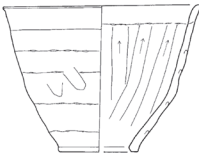
高坏A形式  坏A形式の坏部をもつ器種	高坏E形式  体部と口縁部の境に稜をもたない 坏C形式＝外反口縁坏の坏部を有する器種 柱部が中実になっている
高坏B形式  エンタシス状の柱部を有する器種 古墳時代中期からの和泉式における高坏	高坏F形式  体部と口縁部の境に稜をもつ 坏C形式＝外反口縁坏の坏部を有する器種 柱部が中空になっている
高坏C形式  体部から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる器種	高坏G形式  体部と口縁部の境に稜をもつ 坏C形式＝外反口縁坏の坏部を有する器種 柱部が中実になっている
高坏D形式  体部と口縁部の境に稜をもたない 坏C形式＝外反口縁坏の坏部を有する器種 柱部が中空になっている 0 10cm	高坏H形式  非常に器高が低く、粗雑な坏部を有する器種 断面X字状を呈する 高坏C・D・E・F形式の型式変化より出現する 0 10cm
高坏I形式  坏D形式＝須恵器坏身模倣坏の坏部を有する器種	高坏M形式  体部から口縁部にかけてまっすぐに外傾する坏部を有する器種 甌A形式  口縁部が直立する器種
高坏J形式  坏E形式＝素縁口縁坏の坏部を有する器種	甌B形式 甌を祖型として発生した器種    1型式 甌の形態をやや保つが、頸部のくびれがかなり緩くなったような形態となる 2型式 甌の形態が崩れ、口縁部径が最大径となる形態となる 3型式 2型式と同様な形態を保つが、胴部断面が直線的になる 0 10cm
高坏K形式  深さのあるコップ状の坏部を有する器種	甌C形式 甌B形式のうち、器高20cm未満である小型の器種   1型式 口縁部径が最大径となる形態となる 2型式 1型式と同様な形態を保つが、胴部断面が直線的になる 0 10cm (高坏M・甌A・甌C)

図5. 高坏の器種分類表①（筆者作成）

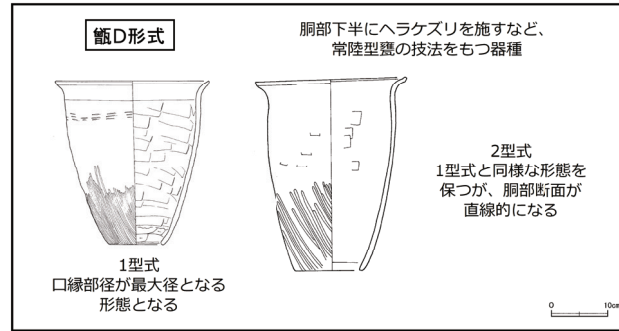


図 6. 高坏の器種分類表②および甗の器種分類表①（筆者作成）

表 1. 高坏の器種別消長表（筆者作成）

		県央地域													共伴須恵器	備考
	遺跡・遺構名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M		
1期	三反田下高井遺跡第69号住居跡		1													
1期	三反田下高井遺跡第192号住居跡		1	2												
1期	森戸遺跡第91号住居跡		2													
1期	三反田下高井遺跡第165号住居跡		2										1	1		
2期	山崎遺跡第3号住居跡							1	1							
2期	森戸遺跡第47号住居跡							1								
2期	山崎遺跡第7号住居跡							1	2							
3期	山崎遺跡第33号住居跡					1										
3期	三反田下高井遺跡第50号住居跡				2			1				1				
3期	大戸下郷遺跡第56号住居跡				1			1								
3期	三反田下高井遺跡第51号住居跡													1		
3期	森戸遺跡第56号住居跡			1				4	1				1			
3期	三反田下高井遺跡第176号住居跡							1								
4期	半分山遺跡第66号住居跡							2								
4期	森戸遺跡第103号住居跡								1							
4期	大戸下郷遺跡第65号住居跡		1													
5期	三反田下高井遺跡第66号住居跡							1								
5期	森戸遺跡第64号住居跡				1											
6期	武田石高遺跡第107号住居跡							1							飛鳥Ⅱ～Ⅲ	有段口縁坏の坏部(7)

		県南地域													共伴須恵器	備考
	遺跡・遺構名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M		
1期	西平遺跡第13号住居跡				1		1								TK216	
2期	炭焼遺跡第3号住居跡						1									
3期	カマ田川波遺跡第6号住居跡						1									
3期	カマ田川波遺跡第9号住居跡					1		1							MT15	
3期	木工台遺跡第235号住居跡												1			
5期	炭焼遺跡第14号住居跡									1					不明	
5期	西平遺跡第69号住居跡								3							

		県西地域													共伴須恵器	備考
	遺跡・遺構名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M		
3期	辰海道遺跡第248号住居跡					3										
6期	犬田神社前遺跡第205号住居跡						2			1					飛鳥Ⅲ～Ⅳ	

		県東地域													共伴須恵器	備考
	遺跡・遺構名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M		
1期	下河原崎谷中台遺跡第55号住居跡		2												TK216	
1期	下小池遺跡第47号住居跡			1												
1期	塚本遺跡第2号住居跡		1												TK208	
3期	島名熊の山遺跡第1445A号住居跡						2									
3期	島名熊の山遺跡第2340号住居跡						1									
4期	上野陣場遺跡第111号住居跡						5									
4期	上野陣場遺跡第77号住居跡						4									
4期	上野陣場遺跡第172号住居跡						3									
4期	島名熊の山遺跡第281号住居跡				2		4									
4期	島名八幡前遺跡第70号住居跡				1		4	1								
4期	島名熊の山遺跡第3122号住居跡						1									
5期	柴崎遺跡Ⅰ区第63号住居跡				1											
5期	上野陣場遺跡第25号住居跡								6							
5期	島名熊の山遺跡第510号住居跡					1										
5期	島名熊の山遺跡第2323号住居跡						1									
6期	島名熊の山遺跡第3107号住居跡						1									
6期	上野陣場遺跡第177号住居跡								1				1			

表2. 甕の器種別消長表（筆者作成）

県央地域											
	遺跡・遺構名	A	B-1	B-2	B-3	C-1	C-2	D-1	D-2	共存須恵器	備考
1期	下土師東遺跡第21号住居跡		1							TK73	
1期	下土師東遺跡第23号住居跡		1								
1期	武田西端遺跡第77号住居跡		1							TK208	二孔式
1期	森戸遺跡第91号住居跡	1									
2期	半分山遺跡第20号住居跡			1							
2期	山崎遺跡第3号住居跡			1							
2期	森戸遺跡第47号住居跡			1							
2期	武田西端遺跡第97A号住居跡	1	1							TK47	
2期	半分山遺跡第61号住居跡			1						TK47	
2期	森戸遺跡第105号住居跡	2								TK47	把手付(7)
2期	山崎遺跡第7号住居跡			2							胴部下端に穿孔(18)
2期	山崎遺跡第18号住居跡		1							TK23-TK47	
3期	三反田下高井遺跡第96号住居跡			1						TK10	B-3?, 二孔式(11)
3期	森戸遺跡第56号住居跡	2									
3期	半分山遺跡第19号住居跡			1							
3期	三反田下高井遺跡第176号住居跡			2							二孔式(24), 把手付(25)
3期	船窪遺跡第10B号住居跡			2							
4期	半分山遺跡第66号住居跡			2							
5期	武田西端遺跡第51号住居跡			1						TK43-TK209	
5期	武田石高遺跡第4号住居跡			1							
5期	武田石高遺跡第45号住居跡			1							
5期	武田石高遺跡第76号住居跡			1						TK217	
5期	武田石高遺跡第14号住居跡				2						
6期	武田石高遺跡第107号住居跡			1						飛鳥Ⅱ～Ⅲ	
6期	大戸下郷遺跡第43号住居跡			1							
鹿行地域											
	遺跡・遺構名	A	B-1	B-2	B-3	C-1	C-2	D-1	D-2	共存須恵器	備考
3期	カマ田川渡遺跡第6号住居跡			1							
3期	木工台遺跡第158号住居跡			2							
3期	木工台遺跡第208号住居跡			3							
4期	西平遺跡第11号住居跡			1							
4期	炭焼遺跡第6号住居跡			1							
4期	炭焼遺跡第23号住居跡			2							
6期	木工台遺跡第216号住居跡			1	1					飛鳥Ⅳ～Ⅴ	
6期	木工台遺跡第133号住居跡						1			飛鳥Ⅳ～Ⅴ	
県西地域											
	遺跡・遺構名	A	B-1	B-2	B-3	C-1	C-2	D-1	D-2	共存須恵器	備考
2期	犬田神社前遺跡第110号住居跡	1									
2期	辰海道遺跡第143号住居跡			1							
2期	辰海道遺跡第666号住居跡			1							
3期	辰海道遺跡第248号住居跡			1							
3期	犬田神社前遺跡第117号住居跡			1							
県南地域											
	遺跡・遺構名	A	B-1	B-2	B-3	C-1	C-2	D-1	D-2	共存須恵器	備考
1期	下小池遺跡第47号住居跡	1									
1期	塚本遺跡第2号住居跡		1							TK208	
1期	ヤツノ上遺跡第29号住居跡										
2期	石橋南遺跡第7号住居跡	1		1		1					把手付(19)
2期	石橋南遺跡第1号住居跡	1									
3期	薬師後遺跡第48号住居跡			1			1				多孔式(190)
3期	平北田遺跡第29号住居跡			1		1					
3期	島名熊の山遺跡第718号住居跡			1							把手付(24)
3期	石橋南遺跡第5号住居跡			2							
3期	石橋南遺跡第16号住居跡			1							
3期	島名熊の山遺跡第2838号住居跡			1							
3期	島名熊の山遺跡第1445A号住居跡			2							
3期	島名熊の山遺跡第2340号住居跡					1		1			
3期	石橋南遺跡第10号住居跡							1			
4期	石橋南遺跡第12号住居跡			2							把手付(24)
4期	石橋南遺跡第14号住居跡			1							
4期	上野陣場遺跡第111号住居跡							1			
4期	上野陣場遺跡第172号住居跡			1							
4期	島名熊の山遺跡第281号住居跡			1							
4期	島名八幡前遺跡第70号住居跡			1							
4期	島名八幡前遺跡第96号住居跡							1			
4期	平北田遺跡第3号住居跡			1							
4期	平北田遺跡第18号住居跡			2							
4期	西ノ原遺跡第9号住居跡			1							
4期	島名熊の山遺跡第2681号住居跡							2		TK43	
4期	島名熊の山遺跡第3122号住居跡			1							内面黒彩(90)
4期	薬師後遺跡第65号住居跡	1									
4期	前田村遺跡第514号住居跡			1						TK43	
4期	前田村遺跡第525号住居跡							1			
5期	上野陣場遺跡第25号住居跡								1		
5期	島名熊の山遺跡第2351号住居跡							2		飛鳥Ⅰ～Ⅱ	
5期	反子遺跡第5号住居跡							1	1		
5期	井才天遺跡第19号住居跡							1			
5期	島名熊の山遺跡第2323号住居跡			2				1			
6期	島名熊の山遺跡第3107号住居跡			1							
6期	上野陣場遺跡第143号住居跡					1			1		
6期	井才天遺跡第7号住居跡			1							
6期	島名熊の山遺跡第2975号住居跡					1		1			

要な器種は高坏 B 形式、高坏 D 形式から高坏 G 形式および高坏 H 形式である。高坏 B 形式は、古墳時代中期から存在する高坏であり、柱部がエンタシス状に中膨らみして大きな坏部を有する器種である。高坏 D 形式から高坏 G 形式は坏部が外反口縁坏になっており、脚部がラップ状に開く。その中でも、体部と口縁部の境にある稜の有無、柱部の内部での胎土の有無などで区分した。高坏 H 形式は非常に器高の低い粗雑な形態の高坏である。

甕は A 形式から D 形式までの 4 形式を設定した。注目すべき形式は甕 B 形式と甕 D 形式である。甕 B 形式は甕を祖型として発生した器種である。これは甕の形態をやや保った 1 型式は、2 型式になると甕の形態を保たず口縁部径が最大径になるものである。3 型式では胴部断面が直線的になる。甕 D 形式は、先述の「常陸型甕」の技法（口縁端部の摘み上げ、胴部下半ヘラミガキ）を取り入れた形式である。

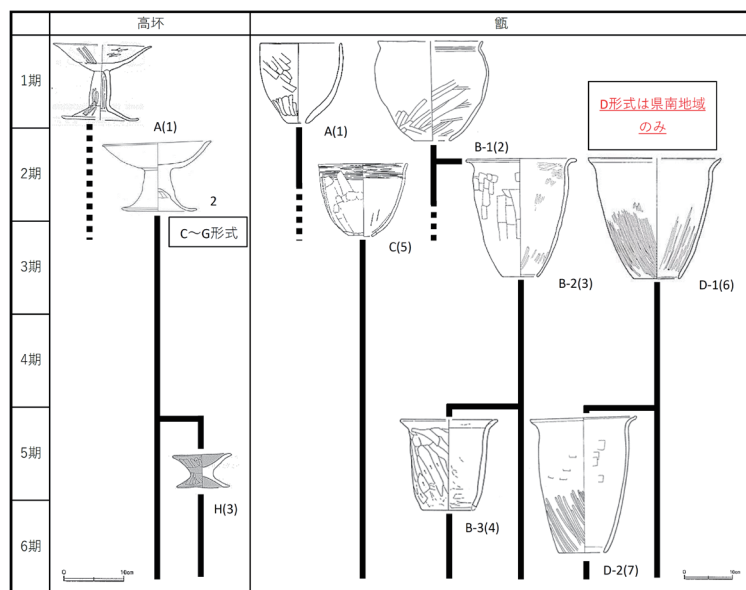
その後、器種別に消長を追跡し（表 1・2）、それに基づき編年表（図 7）を作成した。

なお、以下に示す高坏および甕の性質は一部特定地域の傾向などに基づく試論的な分析があり、今後対象資料を増やし再検証すべきである点を留意すべきである。

（2）高坏・甕の性質

高坏の性質

高坏の消長からみてとれる特質は、おもに三つである。一つ目は、高坏 B 形式から高坏 D 形式から高坏 G 形式のような「外反口縁坏」状の坏部を有するラップ状脚部をもつ器種（以下、「外反口縁坏タイプ」と呼称）への変化である。これは表中での数値としては、県央地域での分析のみで読み取れることではある。しかし、県央地域での鬼高式期の編年（樫村・浅井 1992）や県南地域での編年（樫村 1993）でも、鬼高式期直前に高坏 B 形式と同様な高坏が認められている。ここから、筆者としてはおそらく県全域でも同様であると考えられる。中期末葉頃に存在した高坏 B 形式は、後期になるとすぐさま「外反口縁坏タイプ」へと一斉に変化していく。ただし、柱部の構造や坏部の詳細な構造での地域差は認められなかった。このため、高坏 D 形式から高坏 G 形式はいずれも「外反口縁坏タイプ」の中のバリエーションであると考えられる。



高坏1：三反田下高井69 高坏2：森戸47 高坏3：上野陣場25
甗1：森戸91 甗2・8：下土師東21 甗3：平北田29 甗4：武田石高14 甗5：石橋南7

図 7. 高坏と甗の編年（筆者作成）

二つ目の変化は、「外反口縁坏タイプ」や高坏Ⅰ形式を含む「須恵器模倣坏」状坏部の高坏（以下、「須恵器模倣坏タイプ」と呼称）の多様性と隆盛である。一つ目の変化以降、6 世紀に入るところには「外反口縁坏タイプ」を主体としつつ、「須恵器模倣坏タイプ」と言えるようなさまざまな高坏の器種が出そろった。

三つ目は高坏の 7 世紀における存続である。このことは、茨城県域における土師器様式のひとつの特異性として考えられる。消長表から見て取れるように、7 世紀に入っても少数ではあるものの高坏が認められる。注目すべき器種として、高坏 H 形式が挙げられる。粗雑で器高が非常に低いこの器種は、先行研究などから典型的な高坏の型式変化の結果生じた器種であると考えられる。新しいものでは一括遺物から 7 世紀後半と考えられる遺構でも出土しており、長期的な高坏の利用を見てとることができる。

甗の性質

甗における分析では、基本的に以下のような変遷が考えられる。初元的な甗である甗 A 形式は、既に中期から存在している。その後、甗型の甗である甗 B 形式が出現し、主な甗として用いられるようになる。甗の形態が徐々に型式変化した結果甗 B 形式 2 型式へと変化し、とくにこれが主体的な甗として用いられるようになる。

「常陸型甗」の技法を取り入れた甗 D 形式（以下、「常陸型甗」）は、分析の結果、県南地域のみで認められる器種であることがわかった。先述の「常陸型甗」における地域性を追認するような結果であり、6・7 世紀における「常陸型甗」の利用は県南地域の特徴であると考えられる。

県南地域の「常陸型甗」の利用については、檜村宣行によると 8 世紀初頭まで継続しているとされている（檜村 1998）。「常陸型甗」の動向として、「常陸型甗」の出現と同時に出現し、7 世紀前半には主体的な甗として用いられる。その後 8 世紀初頭まで用いられた。この先行研究からは時期と形式ごとの割合での整合性があり、検証の妥当性は高いと言える。

IV. 地域性に関する先行研究との比較検討

（1）関東の土師器様式の地域性に関する先行研究

関東地方における 6・7 世紀の土師器様式に関する研究でとくに注目すべきものは、長谷川厚によるものである（長谷川 1995a・b）。

長谷川は、とくに土師器坏と土師器甗の形態や整形技法を詳細に分析し、都県やその中の諸地域ごとに地域性を区分した。

長谷川による地域性の要点は以下の通りである（図 8）。土師器坏では、関東全域で須恵器模倣坏が分布している。その中でも、須恵器坏蓋模倣坏は南関東や上総地域、上毛野地域にて主体的である。一方、須恵器も坏身模倣坏は下野や常陸、下総に主体がある。そのほか、武蔵地域の比企型杯や上毛野地域の後田型杯などでさらに詳細な地域性を読み取れる。土師器甗では、基本的にケズリ調整を施す長胴甗が用いられている。その中でもさらに調整技法の方法などでさらなる細分を可能としている。一方、神奈川県西部などではハケメ調整を施す甗が地域性を示している。つまり、ケズリ調整を施す土師器甗が主体的な地域とハケメ調整を施す土師器甗が主体的な地域とに分けられるとしている。

このほか、武蔵地域を起点とした鶴間正昭による律令体制成立期における土師器様式の研究（鶴間 2001）も挙げられるが、本稿では時期や関東地域全域に対する評価を重点とするため、長谷川による分析を基礎とする。

（2）茨城県域の地域性と比較検討

本論文で示した茨城県域の地域性

前項までの考察に基づくと、茨城県域の地域性についてはこのように言える。土師器坏では「須恵器模倣系坏」を主体としつつ、6 世紀に入ると「素縁口縁坏」が坏様式に含まれてくる。土師器甗では、卵殻型のやや丸い甗を用いる。その中で 6 世紀になると県南地域や鹿行地域では「常陸型甗」を用いており、県域内部でもさらに細かな地域性が出現してくる。高坏は県域全体で同じよう

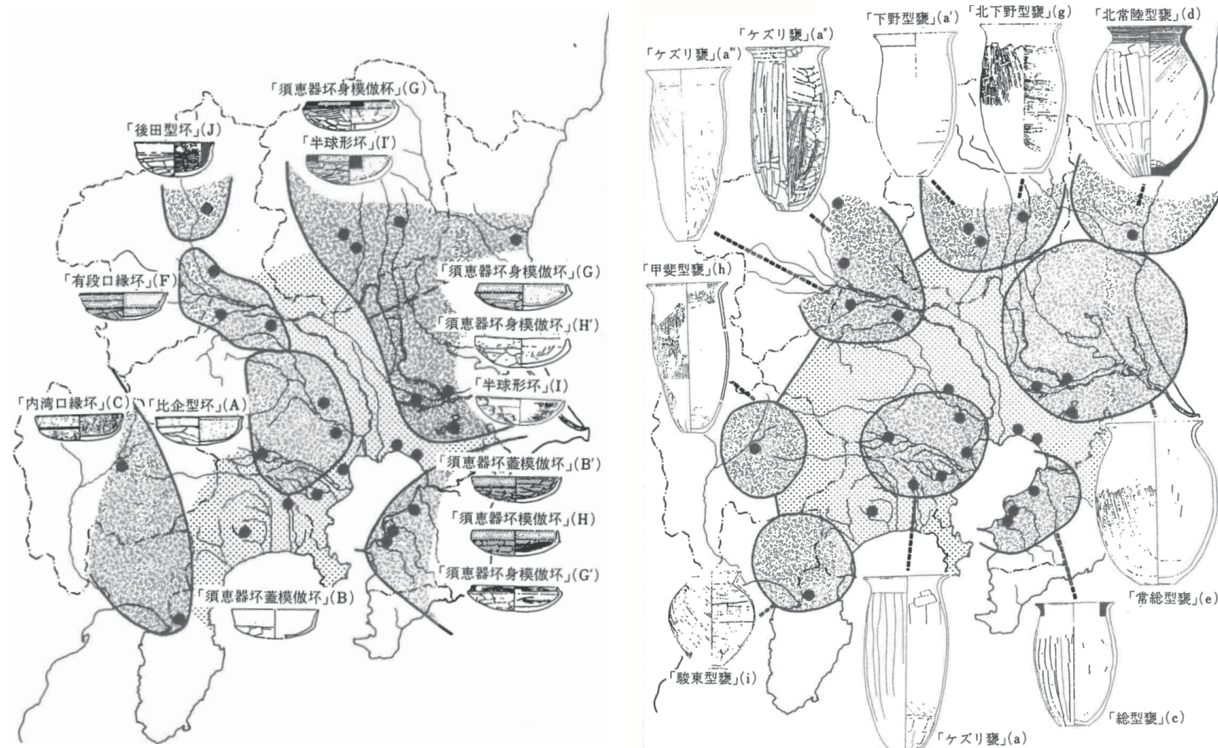


図 8. 長谷川厚による土師器坏および土師器甕の地域性 (長谷川 1995a)

に後期独自の「須恵器模倣坏タイプ」が主体的に用いられ、粗雑で小型のものも出現しながら7世紀にも存続する。

長谷川厚による地域性との比較検討

長谷川が示した茨城県域の地域性は、3種類の土師器
 坏と2種類の土師器甕によって示される。土師器坏は、
 基本的には須恵器坏身模倣坏となっている。それに加え
 て、「坏蓋模倣か坏身模倣か判断に迷う形態の坏」と「半
 球形の坏」（長谷川 1995a）が挙げられており、これら
 茨城県域の特徴的な土師器坏としている。

土師器甕における地域性については、長谷川は県の北部に分布する「北常陸型甕」と県の南部に分布する「常陸型甕」を挙げており、南北の地域性をこれらで分類できとしている（長谷川 1995a）。

本論文で示した地域性との比較をすると、以下のよう
に述べられる。茨城県域では須恵器坏身模倣坏が主体的
であるとしているが、これは今後の考察すべき点である。
「坏蓋模倣か坏身模倣か判断に迷う形態の坏」は、長谷
川の分析した対象が7世紀の資料であることや先述の
様々な編年案（樫村・浅井 1992 など）などから、須恵
器模倣坏の型式変化の結果生じた器種であると考えられ
る。「半球形の坏」については、長谷川論文中の図版か
ら本論文における「素縁口縁坏」と同様であると判断し
た。先述の通り、「素縁口縁坏」は6世紀後半頃から出

現して7世紀には県全体に分布している。つまり、長谷川の示した分布と整合性があると言える。

土師器甕では、とくに「常陸型甕」について調整技法と分布の比較検討を行う。調整技法については、常陸型甕の代表的な調整技法である胴部下半ヘラミガキが重要となる。茨城県域は、長谷川厚が示したケズリ調整を施す土師器甕が主体的なグループに属する。一見、胴部ヘラケズリと胴部下半ヘラミガキは異なる調整技法として捉えられる。しかし、樫村宣行は胴部下半ヘラミガキの由来を須恵器甕に施される胴部ヘラケズリが由来であるとする分析（樫村 1998）を考えると、根本的にはヘラケズリの亜種として考えることが出来るのである。ここから、「常陸型甕」は長谷川厚が示したケズリ調整を施す土師器甕が主体的な地域として、妥当だと言えるのである。分布については、長谷川が示した分布図では県央地域や県西地域も含まれている。しかしⅢ章で示したように、6・7世紀における「常陸型甕」の分布は県南地域および鹿行地域に限定されている。このことは佐々木義則による「常陸型甕」の分析（佐々木 2007）でも、同様の結果が示されている。すなわち、長谷川厚が示した分布に修正を加えることが出来るのである。「北常陸型甕」については、現状筆者が集成した遺跡および遺構のうち、県北地域などの資料が乏しいため、今後この地域の資料をさらに蓄積したうえで分析を行いたいと考えている。

おわりに

本論文では、現在までにまとめられた発掘資料などのデータから、茨城県域における6・7世紀土師器様式の地域性をあらためて検討した。その結果、先行研究に対する追認と批判、さらにはこれまで示されていなかった独自の地域性の確認が出来た。あらたに考えられた地域性としては、卵殻型の胴部を有する土師器甕が多用されることや、高坏が7世紀後半まで存続することが挙げられる。

今後の課題としては、各器種の分析における調整技法の確認を行うことがそのひとつである。とくに坏や甕での分類は、先述の長谷川厚による地域性の分析などでも取り入れられており、器種分類を精緻化するうえでは必須であるといえる。

さらに、今後は周辺地域の当該期における土師器様相との比較検討を行っていく必要がある。6世紀に入ると、土師器坏の一部には、黒色処理を施すようになる。この由来として、長谷川厚は南東北との接触に契機があったと考えた(長谷川 1995b、図9の上方からの黒矢印の一要素)。さらには「外反口縁坏」の由来なども考察すべき点である。これらを考えるためには、周辺地域や関連があると思われる地域の土師器様相を理解していく必要がある。

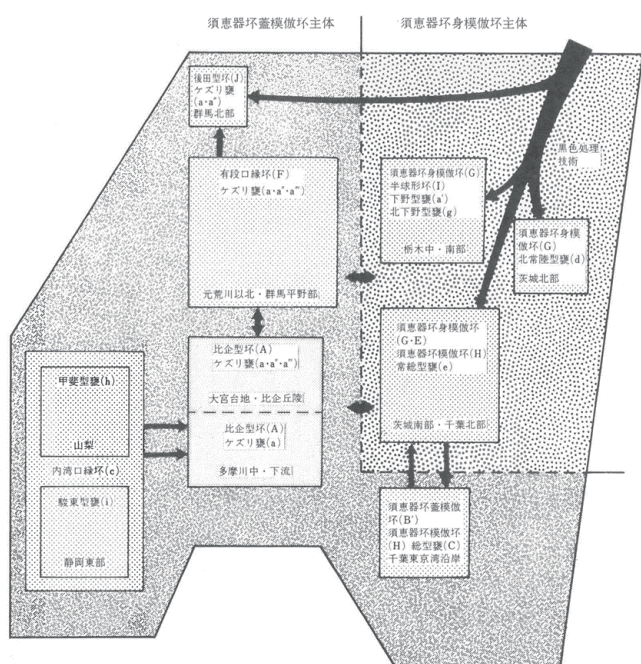


図9. 長谷川厚による土師器の地域間関係(長谷川 1995a)

参考文献

- 渥美賢吾 2013「常陸における七世紀の土器—その様式と史的背景—」『博古研究』45、pp.1-20、博古研究会
- 伊東重敏 1954「鬼高式土器」『ヒタチジ』15、pp.1-12、常北古代研究会
- 伊東重敏 1971「水戸地方における土師器についての二、三の考察」『茨城考古学』4、pp.1-12、茨城考古学会
- 稲田義弘 2003『茨城県教育財団文化財報告第190集 熊の山遺跡 島名・福田坪地区土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』茨城県教育財団
- 海老沢稔 1980「茨城県内出土土師器の検討(1) 鬼高・真間期における茨城県内出土土師器編年試案」『婆良岐考古』1、pp.11-27、婆良岐考古同人会
- 樫村宣行・浅井哲也 1992「常陸地域の鬼高式土器」福田静江(編)『考古学ジャーナル』342、pp.28-36、ニュー・サイエンス社
- 樫村宣行 1993「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』2、pp.123-134、茨城県教育財団
- 樫村宣行 1998「常陸型甕」編年小考」『列島の考古学—渡辺誠先生還暦記念論集—』、pp.235-244、渡辺誠先生還暦記念論集刊行会
- 加藤雅美・西野則史・浅井哲也 1990『茨城県教育財団文化財報告第55集 一般国道349号線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 北郷C遺跡・森戸遺跡』茨城県教育財団
- 黒沢彰哉 1986「茨城県中・南部における六・七世紀の土師器坏について—筑波町小田橋遺跡出土遺物を中心として—」『婆良岐考古』8、pp.69-88、婆良岐考古同人会
- 佐々木義則 2007「常陸型甕の生産と流通—奈良時代以前の様相—」『武田石高遺跡—奈良・平安時代編—』、pp.251-264、ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 鈴木素行・佐々木義則・稲田健一・長沼正樹 2010『(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第40集 武田遺跡群 総括・補遺編』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 高橋誠・宇田敦司・小倉和重・松田富美子 1999『財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書145 南羽鳥遺跡群Ⅲ』財団法人印旛郡市文化財センター
- 中村哲也 2003「“常陸型甕”以前—桜川流域における古墳時代甕型土器の型式学的検討—」『領域の研究—阿久津久先生還暦記念論集—』、pp.197-206、阿久津久先生還暦記念事業実行委員会
- 西弘海 1974「土器様式の成立とその背景」小林行雄先生古稀記念論文集刊行委員会(編)『考古学論考』、pp.447-471、平凡社
- 長谷川厚 1995a「東国における七世紀への胎動—土師器からみた六世紀から七世紀への東国の状況—」『古代探叢Ⅳ—滝口宏先生追悼考古学論集—』、pp.443-475、滝口宏先生追悼考古学論集編集委員会・早稲田大学所沢校地蔵文化財調査室
- 長谷川厚 1995b「東国における律令制以前の土師器の特徴について—東国の土師器の画期と生産・流通のあり方を中心にして—」『東国土器研究』4、pp.201-221、東国土器研究会

**Temporal Changes and the Regional Differences in the Production and Use of Haji Earthenware
Pottery of the Sixth- and Seventh-Centuries, A.D. in the Present Ibaraki Prefecture, Eastern Japan**

KONISHI Ryūsei

This paper examines temporal change and regional differences in the assemblages of haji-earthenware pottery of the sixth- and seventh-centuries in the present Ibaraki Prefecture, eastern Japan. The author's study is important because there are few previous studies on haji-earthenware pottery in this region. First, deep bowls declined toward the end of the fifth century in the whole regions of Ibaraki. The pottery assemblage drastically changed at the beginning of the sixth century as shallow bowls adopting the morphology of suè-stoneware shallow bowls comprised the major portion of the pottery assemblage. As time passed, the pottery assemblage changed along with the appearance of shallow bowls with simple rims. Regional differences in the production and use of the Hitachi-type pots became clear in the sixth century and after. While the morphological change in pedestalled bowls happened very quickly from the fifth to sixth centuries, the change was very slow from the sixth to seventh centuries. Spatial distribution of the Hitachi-type steamers was the same as the case of the Hitachi-type pots. While the regional differences in pottery assemblages the author has found confirms the validity of preceding study by HASEGAWA Atsushi, the author newly recognized the regional differences in the Hitachi-type pots of the seventh century.

KEYWORDS:

Earthenware pottery, regional difference, eastern Japan, sixth- and seventh-centuries.